

小金井懐かしの「田舎」

文人の 武蔵野

大岡昇平は、どのようにして小金井と出会ったのでしょうか。

1945年、レイテ島での俘虜生活から解放された大岡は、12月に帰還し、48年1月30日、家族と上京。東京都北多摩郡小金井町（現・小金井市）の富永次郎宅に転居します。「終戦後、東京都ではあ

大岡昇平 ⑤



武蔵野公園近くのムジナ坂。大岡昇平がかつて近所で暮らしていた（小金井市で）

辺がまっ先に転入禁止を解かれたので、半年富永の家に厄

介になつていたことがありません。鎌倉、神戸、フィリピンと十年以上東京を離れて転々としていたので、武蔵野の黒土がなつかしく、あたりをよく歩き回りました」と大岡自身が語っているように、直接的には「都会地転入抑制緊急措置令」（46年3月9日）と「都会地転入抑制法」（47年12月22日）が関係しています。住宅難、雇用及び食料並びに災害に対処するため、「都会地」における人口集中を制限するための法令です。「都会地」としての東京と非都会地としての東京とが区別されることになり、後者がより武蔵野であるとされたのでした。

永次郎と親しく交際します。富永はもともと大岡の近所に住んでいましたが、1926年に富ヶ谷（松濤）から小金井に転居し、大岡は泊まりがけで富永家に遊びに行くようになります。大岡が小金井を知ったのはそのときが初めてです。「武蔵野の黒土がなつかしく」とあるのは、久しぶりに訪れた小金井の地が故国の地として懐かしく感じられたという意味になります。「小金井といえば、大変な田舎で、武蔵野の真つただなかの感じでした。富永の家は深大寺から貫井、国分寺に至る段丘の中腹にあり、野川という小川の流域を見晴らし、冬は西方に雪をつけた丹沢山塊と富士山が、絵にかいたよ

うに見えました」という大岡の回想からもわかるように、大岡にとつての小金井もまた並木仙太郎らと同様に武蔵野の中の武蔵野でした。大岡にとつての小金井は、小川の流域（野川）を少し上から見晴らし、かつ山々を見渡せるような台地（武蔵野段丘）にありました。そのような小金井との出会いは、友人と戦争と法令によってもたらされたものでした。（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。